山形新聞 2011 年 8 月 12 日に掲載

EDITORIAL COLUMN

社説

アルカディア街道

魅力見直し地域振興に

英国人旅行家イザベラ・バードは1878（明治11）年に東北、北海道の未踏の道を訪ね、置賜盆地を「アジアのアルカディア（桃源郷）」とたたえた。2年後に日本での旅行記を出版し、英国などでベストセラーになった。明治初期の日本の社会や生活などをきめ細かく伝えており、130年以上経過した今読んでも興味深い。魅力を再認識し、バードの足跡を地域振興に役立てたい。

バードの旅行記は、川西町出身の英語学者高梨健吉さんが訳した「日本奥地紀行」や2008年に出版された「イザベラ・バードの日本紀行」などの翻訳本があり、関連する書籍も多い。山形市の会社社長で元教員の渋谷光夫さんは最近、県内ルートを詳しく紹介する「イザベラ・バードの山形路」を刊行した。

「日本奥地紀行」によると、バードは新潟から十三峠を越えて川西に入り、南陽、上山、山形、新庄、金山などを経て秋田へ向かった。県民になじみの深い「アルカディア」の一節は、上山で書かれた。置賜盆地の様子を「鋤（すき）で耕したというより鉛筆で描いたように美しい」と表現しており、高い場所から見下ろした眺めではなく平野を通って近くから見た風景を後で振り返ったらしい。

初代県令三島通庸が整備を進めていた山形市については「大通りの奥の正面に堂々と県庁があるので、日本の都会には珍しく重量感がある」（イザベラ・バード「日本奥地紀行」）とする一方で、ヨーロッパの酒のまがい物が売られているなどと指摘し、外国のまねをしても中身が伴わなかった地方都市の一面に鋭い観察眼を向けている。さらにピラミッド型の山や杉の美林に囲まれ「ロマンチックな雰囲気の場所である」（同）と評した金山など、行く先々で外国人から見た当時の様子を書き残した。

バード研究の第一人者、金坂清則京都大大学院教授は「ツイン・タイム・トラベル」という旅の形を提唱している。過去の旅行記と現代の旅を重ね合わせ、二つの時空を楽しむもので、教授自身が撮影した写真とバードの写真、記述などを対比する展示会を国内外で開いた。バードや芭蕉の「奥の細道」などを含め本県の観光を考えるヒントになりそうだ。

県内にはバードが旅した時代の面影を残す街道や風景が数多く残る。バードが悪天候で難儀をした十三峠では、黒沢峠や萱野峠で地元住民が敷石道を復活させるなど歴史をまちづくりに結び付ける活動が目立つ。金山、川西、上山、天童の4市町にバードの碑が設けられ、南陽市のハイジアパーク南陽には関係資料の展示コーナーもある。ことし5月には、バードが歩いた県内ルートの探訪などを通じて活性化を図る「アルカディア街道I・B倶楽部」が発足した。

本県は、旅で通った各県の中でも特にバードに対する関心が高く、県が2000年度からアルカディア街道復興計画事業に取り組むなど、さまざまなアクションを起こしてきた。それだけに山形から「バードの道」を発信することには価値がある。各地域の歴史的な資源を掘り起こしながら連携を深め、観光客を呼び込むと同時に県民が楽しめる素材として存在感を一層高めていきたい。